

私が博物館屋になることを志したのは高等学校の2年生でした。学校の帰りにいつものように本屋に寄って雑誌の立ち読みをしていたとき、何かの雑誌に学芸員になる方法を紹介した小さい記事を見つけました。このとき学芸員が国家資格のある専門職であることを知りました。博物館・美術館に対する関心は中学2年生のとき赴任してきた美術の先生が、ときどき土曜日の午後に美術館につれていってくれたものがきっかけで、高校生になったときにはしばしば展覧会回りをするようになっていました。

美術館屋を目指して理論と実技を弊習させることをうたい文句にした東京芸大の芸術学科に入りました。文学部の美学・美術史系よりは実際にものを作る人たちがそばにいるほうが得るのが大きいと考えたからでした。それから45年たってもこの選択は正しかったと思っています。でも1,2年するとかなり疑問を感じ始めました。美術理論の授業が、個人的な印象と作者の感性への推測で展開される事に抵抗を持ち始めたのです。

3年生になった早々の春休み開けに、学科の研究室で新しく配布された学内電話帳で修復技術研究室というのを見つけました。助手に研究室の所在と内容を聞いても、知らないといえます。その2年前に油絵の助教授と助手の二人で開設し、半年前に助手が留学したので、油絵の学生3人を加えて再出発したばかりの学内でもほとんど知られていない教室でした。先生は突然に「入れてくれ」とおしかけた私の話を聞いたうえで、「中途半端な気持ちでこられては困る、そのためには所属学科の主任教授から了解をもらって来い」ということになりました。主任教授は、実技と理論の弊習を看板にしたのだからそんな学生がいてもいいだろうとあって、紹介状を書いてくれました。この時点で実質的には専攻を変えてしまったのです。

当時、大学院は旧制大学だけでしたが、新制大学にも設置する移行過程として2年制の専攻科というのが出来ることになり、専修コースの編成が行われました。そのときに実際に対象になる学生がいるなら絵画系の中に保存修復技術専攻をおいてもいいのではないかとということで、卒業と同時に第1号学生になりました。設置には当時の文化財保護委員会、今の文化庁の意向も働いたと聞いています。2年の課程を終えたところで2年制専攻科は廃止となり大学院が新設され、この課程では最初で最後の学生でした。

専攻はできたものの先生は実技系の一人ですから、あとは文化財研究所保存科学部や科学警察研究所の先生方が自然科学系の講義を持ってくださいました。当時の文化財研究所は化学3人、物理2人、生物1人という小規模で全国の国宝重文をみていたのですから、授業はかなり変則づくめでした。勉強をはじめて4年目にはいる頃にはかなりいろいろなことが分かってきました。すこしまじめに勉強すると先生もつまってしまうことがときどきおこりました。層が薄いから仕方ないのです。卒業後、1年半ほど大学で副手を務めました。留學生試験を受けて1964年秋からベルギー政府の奨学金で王立文化財研究所の研究生になりました。所長のP・コールマン博士はユネスコの文化財保護部門の専門委員を兼ね、研究所は1年単位で国際的に研究生を受け入れて教育をしていました。最初の年の同期生はスエーデン、ドイツ二人、フランス、オーストリア、ユーゴスラビア、スペイン2、メキシコ、ペルー、キューバ、ブラジル、イラク、タイ、それに彼の13カ国15人、それに日本でも先生だった文化財研究所の岩崎友吉先生が6ヶ月間在外研究員で研究生仲間に入りました。岩崎先生も保存科学の全体像をつかんだのはこの時期だったと伺って

ます。2年目はノルウエー、ユーゴスラビア3人、イギリス、ガーナ、ナイジェリア、ペルー2、ブラジル、タイ、イラク、インド2、日本2という11カ国16人でした。3年目は新規受け入れなしで、非常勤研究員扱いになった私一人が残りました。この最初の2年間は、私のその後を決めるキイとなりました。西欧の一部以外は当時まだ発展途上国でした。このときの仲間たちを通じて途上国が抱える問題、内在する民族問題などを肌で覚えました。

もう一つは、共同研究の面白さを知ったことでした。研究所には自然科学、美術史・考古学、写真それに各種の修理技術者が全部で80人ちょっと集まっています。国内からさまざまな修理物件が持ち込まれます。毎週月曜の午前中が所内公開の検討会の日でした。このときに修理方針の検討や中間報告がでます。新着ものは歴史的背景、過去の修理歴、製作当時の材料や技術、修理に使う材料の適否などを数週間かけて検討します。各部門から報告がでて、全員で検討します。最後に担当責任者をコールマン教授が決めますが、調査の段階では、誰でもが参加できます。研究生にはときどき事前に問題点を耳打ちされました。予め調べておけという意味ですが……。よりよい修理をするために広い領域からの知恵を集める意味と価値を覚えました。

3つ目は、自然科学と人文科学の本当の接点を知る機会を得た事でした。初年度の仲間のうち4人が化学出身でした。この4人に加えて私が化学室に配属になりました。とりわけイラク、ペルー、タイの3人はそれぞれ政府に採用されたものの、女性だという理由で博物館に採用になり、人文科学との接点を理解することに悩んでいました。私の出身が美術史と分かったときに、3人で時間外の勉強会を始めました。3人が美術史を、私が化学の補習をやろうというわけです。お互いの下宿を持ち回り、休日には一緒に美術館へ行きました。私が先生役になる時間はやや多かったのですが、一番学んだのも私でした。15、6世紀の油絵はなぜ複雑な彩色手順をとるのか、印象派の絵画はなぜ不透明感が強いのか、いちども習った、考えた事もないような質問を浴びました。卒論で科学技術史に近いことをかじったお影で多少は答えが出せましたが、自然科学の頭で理解できる答えが必要でした。私は知識ではなく思想としての自然科学を身につけました。絵描きとペンキ屋が同業ということを発見したのもこの勉強会でした。彼女らも文化現象を自然科学で整理する手がかりをみつけ、結局、4人とも大きく転身しました。次の年に仲間入りしたペルーの技術者は抜群の模写技術を持つ画家でした。彼は本務の間を見て模写を作るのですが、4人の勉強会の成果を基礎にさまざまな仮説をなげかけました。かれも興味津々で提案をやってみるのです。これも面白い勉強でした。

1966年11月3日、フィレンツェで大水害が起こり、冠水した文化財の修理のために世界中に協力要請が出ました。研究所はその頃、人材を出せるゆとりがなく、彼に実習を兼ねて応援に行かないかと声をかけました。翌年3月の3週間、応援軍にはいりました。半年後とは言うものの街中が野戦病院のようで、保存修理の基礎が分かるものは学生ボランティア付きの助監督として対策本部から機械的に配属されました。古い板絵だけはヨーロッパのベテランたちが手がけました。彼の配属先は図書館でした。研究所で同期のガーナ人が一緒でした。ここで、最良の処置でなくともよいから誤りのない範囲での応急処置を最短時間でやる、ということを知りました。知っている知識を総動員しなければなりません。配下に30名近いボランティア学生がつけました。国籍も専攻もさまざまです。善意と体力だけのチームでした。総監督はこの世界では最も著名な先生で、定年直前に本務を

後任に任せてフィレンツェに詰めていました。毎晩、作業後に先生と夕食をともにしながら翌日の処置予定を決めました。忙しい3週間でしたが、すごい度胸がつかしました。

帰国して待っていたのは日本万国博の仕事でした。世界中から500点近い名作を集めたのですが、保存管理の専門家を会場に常駐させるという条件付きの国が多く、困りかけたところへ手ごろな人物があらわれたという次第です。博物館屋としてのデビューでしたが、推薦して下さった先生以外にはまったく無名でした。随行したクーリエの中に、「コールマンが使い物になるかもしれない日本人が入ってきた、と言っていたのはお前か?」という人がおり、会期末には何人かの方に存在を知っていただけました。

万国博の仕事が終わったのち、埼玉県立博物館へ保存担当の学芸員として入りました。ただ一人の保存担当の配属は企画普及課で、私以外は広報と教育担当でした。同僚が忙しいときは教育の仕事も手伝いました。学生時代に、外国の博物館学の本を読み漁っていたあいだに日本の博物館では保存と教育が大きく遅れている事を知ったので、専攻した保存のほかに、ヨーロッパにいた間も機会を見ては教育の資料は目を通していました。そのストックが片手間とはいえ役に立ち始めました。

2年半ほどしてひょんなことから東京都美術館に移りました。貸会場専門だった美術館が新館建設を気に自主事業主体に切り替えるというのです。学芸員になった後輩の相談に乗っているうちに私自身が移動しないとどうにもならない状態に進んでしまいました。美術館では展覧会の企画よりひろく事業計画全体の立案と遂行を主たる任務とするという条件で移籍しました。最初の仕事は美術家団体への貸会場専門であった美術館のイメージを壊し、もっと広く美術に関心を持つ新しい観客層を開発することを考えました。

作家の制作風景や修理の現場を解説付きで見てもらい、盲学校との提携、初心者向けの本格的な基礎教育などをやってみました。理工系博物館のデモンストレーションや埼玉時代の教育経験がずいぶん役立ちました。これらの企画は後発の美術館が改良しながら採用してくれたので、火付け役の役割を果たしたと思っています。こんな仕事に疲れて、本来の保存屋に戻りたくなっていた頃にみんぱくから誘いがかかりました。

民族技術と保存担当ということでしばらくは博物館を離れての研究三昧でした。もっとも肌染み付いた博物館屋は捨てきれず、時々他館でのボランティアは続けました。

博物館の世界に引き戻されたのは1992年6月に横浜美術館で開催された美術館教育普及国際シンポジウムでした。ブームになりつつあった美術館教育に15年以上前に手を出した火付け役との一人として引き出され、これを機会に古い交友が復活し同時に若い人々との交流が再燃しました。同じ頃にJICAから途上国の博物館職員再教育プログラムを作るはなしがあり、もう一度博物館屋の世界に戻る事を決めました。と同時にみんぱくでの博物館国際協力セミナーの実施がきまりました。

自分の中の基礎を作って下さったコールマン教授と昔の仲間たちには、長いこと精神的な負債を感じていました。現役の間にせめて利子だけでも払いたい、そんな気持ちが私にこの大仕事をひき受けさせました。博物館学セミナーとJICAプログラムの基本は皆さんよくご存じの通りです。すべて3分の1世紀前に考えたことを基礎に、その後の経験と交友を通じて発酵させてきたつもりのものです。でも実施には実に多くのかたがたの協力をいただき、別なかたちでの借金を負ってしまいました。この借財も利子くらいはお払いするつもりですが、いつまでに払えるか自信がありません。